

京鹿子



昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成二十年六月一日発行
通巻一〇〇六号(毎月一回一日発行)

6月号

花は葉に

丸山佳子

光陰の矢にしたがひて山笑ふ

心地よき空腹おぼゆ開花宣言

すつとんで携帯不要の初つばめ

人住まぬ裏みち行くも更衣して





誰を待つ聞かぬが礼儀三味線草
宇治河の草より知らぬ蝶ま白
腑ふにおちぬ煙ひろがり烏雲に
花は葉に鞆の中は私物のみ
猪いのししのここに幸あり喰みしあと
春はゆき無休無給のエレベーター



豊田都峰

清響集 その八十六

天蓋も芽吹き明智一族墓

山よりも湖より風に里芽吹く

山ふもと小さく野焼してゐたり

影も空もほのめく花のひと日なる

鳥ぐもり子規のさ庭の十歩なる

土筆野はひとすぢ山陽古道とす



風光る一朶の雲のなほみかく
余花のみちおのづからなる仏みち
からまつの芽吹けば辰雄の館径
生き様を羽音に蜂の遠出なる
わが海市溢れすぎたる自壊かな
川筋は都をどりのさそひ風
影もなき官衛址なり茎立す
駅家址は犬ふぐりともりゐる畑

秀華採集

氷爆のうらはは迷宮かも知れぬ

伊藤 希眸

氷爆にはゴシック建築めくイメージがある。そんなことからの迷宮の連想か。入ることが出来ない場所、ひよつとしたら洞穴かも知れないが、連想は洒落ていて楽しい。

一羽づつ翔つ折鶴や春の雪

松井悦子

ひとひらは一語にも似て鳥帰る

佐々木 紗知

前句の「春の雪」のあしらいがたいへんよく、情景が豊かになった。後句のはなむけの思いがいい措辞でなされている。

鈴鹿 仁

青葉騷

仏眼に一光見たり青葉騷
風に聴くたんぽぽ径はほとけ道
つばめの子豆腐の白さ見て育つ
親の恩するり呑み込む燕の子
新茶汲むつつがなき日の風のいろ
走り茶やゆたかに流す煙出し
どの木にも風の音してみどりの日

近 詠

宇都宮滴水

八十七夜

手鏡に春意閉づれば耳うとし
足生えて蝌蚪は尻尾を売りとばす
想ふべし八十七夜のくすり指
木葉木菟火伏の夜の燭ふやす
半夏生五入ばかりで老い太る
かたつむり活断層を打診せり
沙羅の花鴉が戒名消しに来る

(句集「葦の角」より)

神麓集



新関 一杜

眞晝の丘に描くメルヘン虹の門
季語として青野と作り誓子の句
走り来る少年の瞳青くるみ
日本でも長きパン売るパリー祭
蛸籠売りし夜店はひと昔

夏の帯 林 日圓

紋彫りは地道な作業更衣
紋紙の図案織機に夏ごろも
紋彫機に向かふ横顔汗滲む
網戸はめ技こだはりの西陣織
糸染めて工程二十夏の帯

江戸流しびな 北村 香朗

流しびなに誘はれ心昂ぶれる
卒寿にして初のひびなを流しけり
願ひごと秘めて隅田へ流しびな
手を離れ川波のまに雛ながる
春めくや改札口はワンタツチ

雪訛り 丸山 冬鳳

山路はや雪のタイヤのくねくねり
親指の爪より雪片宙を飛び
雪つもる食後の菓苦かりし
雪片や小指の爪より息をかけ
雛の間の灯りは消さず雪つづく

春告鳥 藤岡 紫水

あたたかや小石一つが波つくり
老ふも佳し山が笑へば山を見て
八重椿雨の重さをまとひをり
たちそむる杜の朝霧孕み鹿
啼き移る軽さも風の春告鳥

二月果つ 和田 照海

小濁りして細波や池普請
蛇穴を出て梵妻に叱らるる
陽炎や餌あそびの石切場
昼の灯の点る海峡つちぐもり
本命より義理を大事に二月果つ

神麓集



出血の止まらぬ憂さに雪が降る
マスクして人の痛みを眺めをり
紀元節直立不動を忘れぬし
正直に雪が降つてる真葛原
濡れ色のままで暮れ待つ猫柳

松田 都青

刀痕も弾痕も古り冬座敷
断髪革靴紋付羽織の竜馬像
土佐酒の大徳利の春待ち顔
狭く急な裏階段よ足裏冷え
お登勢の部屋の隅に針箱春いまだ

伏見寺田屋 丹生をだまき

わが死後に残すつもりの梅の酒
薫風や妻の墓前のワンカツプ
あぢさゐの庭に荒れ見ゆ家人病み
麦秋を走つても走つてもひとり
五月雨や妻の形見のつげの櫛

ひとりざけ 竹貫 示虹

咲き出でし白はす黄はす海道忌
風の中天に衆あり海道忌
水面はみどりを統べり花洛の忌
花洛忌や波打ち寄せる響きあり
遠流にも帰るべき日や海道忌

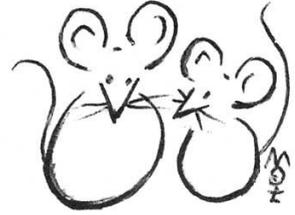
海道忌 沼田 巴 字

寒きびし自暴自棄にはなりません
自滅する奢りのこころ寒きびし
あまつさへ胃潰瘍とは寒きびし
痛むと言ふじれつたきもの日脚のぶ
俱白髪して今日ありぬ日脚のぶ

寒きびし 角 直 指

越しかたや梅にもありぬ花ぐもり
たれか呼ぶ火宅の人を燠火吹く
花狂ひ女はひとり五稜郭
乙姫にかくし子五つ春の海
広辞苑落丁うれし四月馬鹿

福田季枝子氏を偲ぶ 小堀 寛



京鹿子集

豊田都峰選

氷爆のうらはは迷宮かも知れぬ

雪椿来し方ばかり通りすぎ

野の神の一番さきに土筆の子

白梅や持ち重りして漆椀

春の泥捏ねるだけ捏ね妻擬き

一羽づつ翔つ折鶴や春の雪

春一番浜上げの魚銀色に

だんだんに整ふ婚荷梅二月

城跡といふ山の畑梅つぼむ

梅咲くや人語に鳥語和す日和

千葉 伊藤 希眸

城陽 松井 悦子

帆船のハッチが開き水仙忌

革命も恋も遙かや水温む

かぞへたくなる貨車過ぎて山笑ふ

ひとひらは一語にも似て鳥帰る

ふかぶかと壺に水差し霜くすべ

白衣にて朗報を受く梅の午後

楽団に夫婦で混じる梅月夜

春風邪で友臥し無肥の握り飯

卒業式笑顔だつたと娘のたより

夏蜜柑大きき見せるTV電話

千葉 佐々木紗知

アリンナ 伊吹 之博